

学 位 論 文 要 旨

氏 名 安藤 哲也

題 目 就学前の学びをつなぐ生活科学習指導の探究
ー子どもの経験知の見取りに着目してー

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本論文は序章から終章までの全6章で構成されている。序章では、本研究の目的と意図を示した。本研究の目的は2つある。第1に、文献調査による理論的考察と事例研究を踏まえた実践的考察を通して、就学前の学びを生かした生活科学習指導の実相を明らかにすることである。第2に、その研究成果に基づいて、就学前の学びを生活科学習指導へとつなぐ実践的指針を提言することである。接続期カリキュラムにより幼児期の教育と小学校教育をつなぐことを目指した取組には、小学校教育への適応を主な目的とする傾向がある。学びの連続性に着目すると、幼児期の学びとは何か、学びをつなぐとは具体的にどうすることが実践上の課題となる。小学校教師が幼児期の学びを捉える方法として、児童の姿の中に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を見出す方法などが試されているが、いずれも検討すべき課題を残している。

第1章では、文献調査により、本研究で幼児期の学びとする「経験知」を理論的に位置付けた。経験知とは、具体的な体験を通して得た「知」であり、周囲の環境に働きかけ(周囲の環境からの働きかけを受け)、それらの反応を受ける(それらに応じる)といった相互作用の過程や結果を通して得た、自分なりの思考や感覚、行動の様式のことである。また、学びをつなぐ視点から幼児期の教育と小学校教育の相違と関連について明らかにした。幼稚園教育要領等示された「内容」とは、保育者の指導を受けながら身に付けていくものであり、環境に関わって経験する事項であるため、具体的な体験を通して得た「知」である経験知と概念的には同様と考えられる。

第2章では、子どもの経験知に着目した4つの事例研究を取り上げた。これらは、小学校教師による指導方法と小学校教師や保育者の意識に焦点を当て、授業実践とその省察からアプローチしたものである。第1節では、生活科授業において幼稚園等での経験を起点にする意義を、第2節では、小学校教師が子どもの経験知を見取り支援することの意義を明らかにした。第3節では、幼小の学びの連続性に着目することで小1担任の意識には子どもの見取りと支援、保育者との連携について新たな志向が生じることを、第4節では、5歳児担任の

見取りを援用することで幼小の学びの連続性を支え、気付きの質を高める生活科学習指導を実践し得ることを明らかにした。

第3章では、第2章の事例研究に基づき、①子どもにとって学びがつながるとは具体的にどうなることか、②子どもの学びをつなぐために小学校教師は子どもをどう見取りかかわればよいか、③小学校教師と保育者による見取りにはどのような違いがあるかを検討した。①について、経験知を幼児期に得たときと同様な状況で想起し再現したり適用したりすることが子どもにとって学びのつながりであると示唆された。②について、幼稚園教育要領等の内容理解を基に幼児期の教育で得た経験知と経験知を発揮する子どもの姿を想定しておき、自らの経験知を自覚できるような言葉掛けを行うことによって、子どもは関連した自分の経験知を意識し意欲や自信をもつようになると期待できることが示唆された。③について、小1担任と5歳児担任の見取りの背景には実践知の差異があり、指導方法に関する実践知と子ども理解に関する実践知の差異が双方の見取りに関わりをもつことが示唆された。

第4章では、第1章で行った理論的な考察と第2章、第3章における事例研究を踏まえた実践的な考察を基に、就学前の学びをつなぐ生活科学習指導の在り方について具体的な指針を提言した。就学前の学びをつなぐために小学校教師が行うべき子ども理解とは、一人一人の子どもの具体的な体験の履歴を踏まえ、そこでの学びを想定することまでを含む。そのため、保育実践記録の手法として一般化されつつあるエピソード記述による記録を共有することが重要になる。また、子どもにとって学びがつながる学習指導を行うためには、小学校の教師が「学びのつながり」について「関連付く」「繰り返す」「継続する」など、複数の視点で考えるとともに、子どもの経験知を認め、引き出す指導を行う必要がある。そのため、単元の導入で幼児期の教育における経験を想起させ学習活動の起点にする、経験知の発揮を促す学習活動を構想するといった「指導計画の工夫」や、幼児期の教育で得た経験知への自覚を促す、類似した経験をもつ子どもに間接的に影響を及ぼす、既存の経験知の発揮を支え促すといった「言葉掛けの工夫」が重要になる。

終章では、第1章から第4章までの論考を本研究の2つの目的に照らし、本研究の成果と課題として整理した。本研究の限界は、実践的考察の基盤である第2章の事例研究で分析対象に取り上げた事例の内容が限定的・断片的と言わざるを得ないことである。今後の課題は、第2章の各事例研究で残された課題の追究と、第4章で行った提言に対する有効性の実証である。いずれも実践事例を積み重ねながら具体的に検討していく必要がある。

(2,054字)